

進化する大学図書館とライブラリアンの役割

バゼル山本登紀子

10年まえを振り返ると。。

「今、アメリカの大学でライブラリアンと呼ばれる職業が絶滅しつつある」（石松久幸『出版ニュース』2009年9月）の中で、石松氏は的確かつ刺激的に米国大学図書館の現状を報告なさっている。氏の論文は1994年～1995年に米国の図書館情報学部に着任していた筆者にとって、この16年を振り返りつつ現状を再分析する刺激ともなった。あの頃、レファレンスライブラリアンの仕事の中心には、利用者と資料を結び付ける役割があった。DialogやLexis/Nexis、OCLCといった、図書館が高額の加算料金制で購読しているデータベースの複雑なコマンドを駆使し、レファレンス面接を通して利用者の研究ニーズを探り出し、文献検索を手伝う仲介者、「サーチャーの時代」（三輪真木子 1986年）に自分も仲間入りできることに興奮を覚えたものだ。インターネットが図書館で利用され始めた走りだった。すでにスタンフォード大学のエンジニアの学生が「モザイク」なるブラウザを開発していたが、電話回線を使った実にまどろっこしいダイヤルアップ接続で、しかもコンピュータが広範に普及していなかった時代であり、研究活動は図書館に向かい合っていたのが当たり前のことだった。当時からインターネットが図書館をも含めた情報界に大きな変化をもたらすであろうことは議論されていた。1995年の国際会議でテレコム関係者やコンピュータエンジニアに混じって「ライブラリアンも時代を先取りしていかなければ図書館は取り残されていく。」と、叫んでいた一人のライブラリアンが非常に印象的であった。変化の種が蒔かれたことの意味をすでに深く認識していたこの人物は、オハイオ州立大学のモリー・ドノバン日本研究専門ライブラリアンだった。学生だった筆者は、ドノバン女史の迫力に圧倒され、いったいどんな変化が来るのか胸躍らせた。

その後の技術の進展と図書館環境の変化は我々の知るところである。米国では特にここ2年余りの深刻な財政難がさらなる大きな変化に拍車をかけている。本当にライブラリアンという職業は絶滅するのであろうか。

統計でみる研究者の認識

非営利団体 Ithaka S+R グループ(www.ithaka.org/ithaka-s-r)は、2000年以來3年毎に米国高等教育機関で働く研究者（ファカルティ faculty）を対象に、新技術が研究者の判断と行動にどのようなインパクトがあるのかを調査している。2010年4月7日に発表された最新の「2009年大学ファカルティ調査―図書館、出版社、社会への主要戦略的洞察」の一部を見てみよう。（“Faculty Survey 2009: Key Strategic Insights for Libraries, Publishers, and Societies.” <http://www.ithaka.org/ithaka-s-r/research/faculty-surveys-2000-2009/Faculty%20Study%202009.pdf>）「図書館の発見と進化する役割」と題する第一章は、研究者による情報の発見と利用がどのように変化しており、その変化が図書館の役割に対する研究者の認識にどのように影響しているのかを分析している。大学図書館にとって利用者の変化を知る上で大切な分析であるので、ここに紹介させていただく。まず、研究を始める出発点を（1）図書館（2）OPAC（3）GoogleやYahooなどの検索エンジン（4）電子リソース・データベースで比較すると、図書館とOPACはすでに利用者にとってリサーチの出発点ではなくなっている。図書館とOPACから研究を始めるのは科学技術分野では10%のみ、社会科学では20%、人文分野ではまだ30%あるが、全分野において調査ごとに下降線をたどっている。米大学の研究者達のリサーチプロセスの出発点は、ライブラリアンとのコンサルテーションや図書館に足を踏み入れて調査を開始するのではなく、また、図書館のオンライン目録を調べることから始まるのでもない。科学技術分野では90%、社会科では80%、そして人文系の70%以上の研究者が、検索エンジンや電子リソースの検索からリサーチを始めているのである。それでは研究者がリサーチの出発点ではない図書館の機能をどのように認識しているのか。図書館を（1）研究のための資料への入り口（gateway）としての機能（2）研究に必要な学術誌、学術書、電子リソースを購入する購

買者 (buyer) としての機能 (3) リソースを保管・維持するアーカイブ的機能の3機能で見た時、アーカイブ的機能は過去9年間、71%とほぼ横並びの認識状態であるが、研究情報への入り口／ゲートウェイとしての認識は2003年が70%だったのに対し、2009年では59%と落ち込んでいる。一方、研究に必要なリソースの購買機能としての認識は80% (2003) から90% (2009) になっている。ただし、専門分野別にみると、82%の人文系研究者では図書館のアーカイブ的役割 (3役割中の2位) を認識しており、1位のバイヤーとしての役割との差は他の分野ほど大きくない。人文系研究がまだ印刷媒体中心であり、他分野と比較してデジタル化の進みが遅いことを考慮するとようなずける結果である。今後、人文分野でのデジタル化が進んできた時に、どのように変化していくか興味のあるところであると分析されている。また、2009年の調査では上記3つ図書館の伝統的役割に加えて、昨今大学図書館が推進している (4) ファカルティの授業へのサポートと (5) ファカルティの研究の成果を促進するような積極的なサポート、例えばデータの集中的管理、について調査したところ、両者とも (1) の gateway と同じレベルの認識があった。特に自分を研究者というよりも教育者と位置づけている人文系のファカルティは、図書館の (4) と (5) の役割を高く認識する傾向にある。

米国のライブラリアン達はサブジェクトスペシャリストとしての役割を強調し、研究者のパートナーとしてのサービスを推進してきた。また図書館が情報の入り口 (ゲートウェイ) として効率的に機能するように図書館に知的付加価値を加える努力をしてきたが、この調査は、研究者は自分の研究に役立つリソースを調達し提供するという図書館のインフラの役割に価値を見出していると分析する。授業や研究のサポートという比較的新しい努力も次第に認識されてきているとは言え、まだインフラの役割ほど高くは評価されていない。ただ、(4) と (5) の新しい役割は今後図書館にとってのニッチ的可能性を秘めているとしている。

この調査結果を踏まえて現状をみると、伝統的レファレンスサービスを求めてくる利用者の数が下降線をたどっていることは驚くことではない。研究者はもとより、学生にとっても情報への入り口は図書館ではなくなっているのであるから、レファレンスサービスはなくても不自由しないのである。実

際米国の大学図書館では「レファレンスサービス」というラベルを廃止し、レファレンス（的）サービス、ノート型パソコンの貸し出し、ILLで依頼した書籍の受け取り、文献の貸し出しカウンターをすべて1つに集めた「インフォメーションカウンター」や「ヘルプデスク」、もっと直接的に「Ask Here（お尋ね所）」といったサービスポイントに統合している。ハワイ大学マノア校図書館には現在4つのレファレンスデスクがある。筆者が所属するアジアコレクション部でもレファレンスデスクにライブラリアンが一人平均週4時間ほど座っているが、たまに利用者が立ち止まったとしても、iPhoneを差し出して「これ書架にないんだけど他にどこを探せばいいの?」といったお尋ねが主流である。夏学期間は、レファレンスデスクに電話をおき、利用者が直接その時間帯担当ライブラリアンに電話で尋ねる方式をとっているが、2時間に1、2件の簡単な問い合わせがある。現在、統合されたインフォメーションデスクへの移行を考慮したレファレンスサービスの見直しがおこなわれている。

図書館の構造改革への準備―ハワイ大学マノア校図書館のケース

マノア校は1907年創立の州立ハワイ大学のメインキャンパスである。マノア校図書館は翌年1908年に開館し、現在は2万人余りの学生、3,000人近い研究者の研究を支える高等研究学術図書館である。ライブラリアン職は研究者と同様のファカルティ地位であり、採用されて5年後、tenure資格査定で認められると終身雇用資格となる。現在テニュアおよびテニュア候補の資格で働いているライブラリアンが50人、テニュア資格ではないが契約ファカルティとして働いているライブラリアンが3人、合計53人と管理職部門が図書館の運営に携わっている。各部署のなかで、ハワイコレクション・パシフィックコレクション・アジアコレクションは地域研究支援の部署で、大学の其々の地域研究センターと密に協力し研究支援をすることが使命である。筆者はアジアコレクション部の日本研究専門ライブラリアンとして10年間勤務している。

アリゾナ大学を始め多くの大学がすでに斬新な図書館の構造改革を実践しているが、当館は今その過程にある。今年10月1日までに図書館側の試案を大学の管理部門に提出し、来年2月始めに実践に移す計画である。1週間前

には任意提出と断った「図書館業務への興味に関して」という調査が回ってきた。これは、もしこれから部署が変わったり、業務を変えたりする場合、自分としてはどのようなことに興味があるのか、業務間再研修を受けたいものはどのようなものか、等を図書館の管理者に知らせるという趣旨の調査である。これまで専門司書は、部署や業務を変えたり、専門を変えたりすることはめったになかったが、これからの大学図書館の将来をかけた構造改革であるから、効果的にかつ本人の希望を活かして構造改革を推し進めていくために必要な管理者側の情報収集である。

大学図書館の利用者サービスライブラリアンの現状とこれから

―ゲートウェイとしての役割は変化した―

前述したが、筆者が図書館情報学部で学んだレファレンスサービス…レファレンスデスクに座って利用者の質問に答えたり、対面して利用者とりソースを結びつける仕事はほぼなくなった。簡単な質問も専門的な質問も99%電子メールで直接くる。前年度(2008年7月～2009年6月)筆者に届いた電子メールでの基本的質問は17件、専門的質問は98件であった。数としては多くないが、専門的質問をしてくる利用者は、すでに自分でかなりの検索をしてから最後の手段として相談する傾向があり、質問自体は非常に時間のかかる難しいものになっている。1度のメールのやりとりですむものはほとんどなく、調査する時間、実際にメールを書く時間、それに対するフォローなど、かなりの時間を費やす。規定ではメールでの質問は本校の研究員、学生を対象にしたサービスであるが、学外からの質問も多く、特殊なものを除いてそれらにも対応することにしている。その中で学部生からの質問は非常に少ない。2008年のOCLCの調査によると(<http://www.oclc.org/research/activities/past/orprojects/imls/default.htm>) & (<http://www.librijournal.org/pdf/2008-2pp123-135.pdf>)、米国の学部生が情報を探す時、年齢に関係なくGoogleは利用されているが、人的リソースにについては、年齢の若い世代は親、友人、そして先生をあげている(因みに45～65歳の団塊の世代層ではGoogle、同僚、自分の図書、また研究者ではGoogle、同僚、研究の専門家と称される人物)。ここでも大学図書館の利用者にとってのレファ

レンスサービスが相談先ではないことが明確である。

当館では学部生への利用者教育は地域研究専門ライブラリアン以外の部署が担当している。地域研究専門ライブラリアンは主に院生（修士、博士課程）と研究者を対象にワークショップなどの利用者教育を行なう。単発のワークショップとは別に、筆者は2年毎に、東アジア言語・文学部院生対象の必修科目、「日本の書誌・日本研究法」という3単位、週2時間半のコース（通常15コマ）を教えている。これは学期を通して学生との対話ができるコースであり、彼らの傾向を知る上でも貴重な機会である。学期を通して代表的な日本語の参考図書・データベース・ウェブリソースを実際に使い、自分の研究ジャーナルをつけることでリサーチを通した疑問、不安、発見、自己の貢献、研究における仲間との交流、などを体験していく。最後に自分が決めたテーマの注釈を付けた文献リストを完成させる。同時に「コースを通しての個人的回顧」というエッセイを書いてもらうことにしている。「回顧」には異口同音「こんなに色々な（紙媒体の）参考書があることを知る良い経験だった。」「今まで考えても見なかった百科事典の利用方法がわかって役に立った。」「自分の研究への取り組みを客観的に観察できた。」「凡例の利用の仕方がわかって良かった。」また、「ウェブやオンラインの検索は得意だが、面倒でも凡例を読み、使いにくい日本語の参考書にも予期しなかった情報があるという発見ができた。」といった、教えている者にとってうれしい、肯定的な意見が述べられている。また、「ウェブをブラウジングしている時に思わぬ発見があるように、検索するだけでなく、書架をブラウジングしてみて。本から“みつけて！”と呼びかけてくる声が聞こえるかもしれないよ。」は彼らにかなり受けて、「声が聞こえた！」と言って本をクラスで紹介していた。しかし実際は、このコースで課された宿題をやるために図書館に来て紹介した参考図書を使う以外に利用しているようには見えないし、完成したビブリオグラフィもオンラインリソースを駆使したものがほとんどである。英語参考書の80%を除籍しようとしている当館の学生にとって、すでに参考書は読むものから検索するものになっている。それでも筆者は、こういったコースを通しての「経験」の場をライブラリアンが提供していくことは意義あることであり、いつかどこかで「発見の経験」を思い出してもらえれば成功だと

思う。これからさらに工夫し、現代の学生にとって発見体験のできる、魅力あるものにしていける1つのゲートウェイ分野であると思う。

ー予算削減の環境の中で優先するものは何かー

2年前と比べ、書籍購入予算は4分の1に削減、昨年7月からファカルティの給与は一律6%減給になった。図書館も昨年の冬休み、今年の春休み中は閉館となり、学期中も土曜は閉館、平日の時間も短縮された。これまで24時間、一年中ほぼ開館していた状況と比べると大きな環境の変化である。これに対し当初は利用者からの不満も少し寄せられたが、現実には実にスムーズに閉館時間短縮への移行が行なわれた。利用者は閉館前に大量に本を借り出した、と聞いてはいるが、それにしても大学や図書館への不満の声が皆無である、というのはどういうことであろうか。アジアコレクションの逐次刊行物は其々の7分野一律に7,500ドル分のキャンセルを強いられた。すでにオンラインでのアクセスがある新聞・雑誌などを中心にキャンセルしたが、これも利用者からの不満の声なく経過した。書籍予算の大幅削減が通達されてすぐに、アジアコレクションでは研究者に対して必要書籍があれば優先して購入するので連絡して欲しい、との要請をだした。連絡のあった日本研究者4人を除けば、期待したような積極的な反応はなかった。これが、例えば図書館閉館の間、購読データベース・電子リソースが使えなくなる、という状況だったとしたらどのような反応があっただろうか。

この閉館の知らせに強い反応があったのは、冬休みや春休みを利用して当館の特殊文庫の閲覧を予定していた学外の研究者からだった。資料の中にはすでに復刻されていたり、デジタル化されてウェブ上でアクセスできるものもあるが、原資料への閲覧希望は多く、ウェブ上で公開されているからこそわざわざハワイまで原資料の研究にいらっしゃる研究者が増えた。後世へ引き継ぐ知的遺産としてのユニークな文献の発見、保存、修復、デジタル化、アクセスの拡大、知的遺産の共有、分野を超えた他機関とのコラボレーション、などはキーワードであり、プロジェクトを立ち上げやすく、しかも助成金や補助金の獲得につながるプロジェクトの正当化がしやすい。特に地域に根ざしたユニークな文献はその目玉となる。しかもプロジェクトと関連させ

た図書館での講演・展示・イベントを連携させて、地域や学内外へのアウトリーチに貢献できる。これまで特殊文献は専門の利用者を利用の対象にしていたが、教授と協力しこれらの文献をカリキュラムに組み込み、授業を通して学内の学生に広く利用してもらう努力もなされ始めた。図書館が中心となって推し進めている機関リポジトリの構築とあわせてライブラリアンが貢献ができる様々な要素が含まれている分野であると思うし、優先される分野の1つとされている。

－大きく変わりつつある蔵書構築と蔵書管理－

当館のようにメインライブラリーの中にあるアジアコレクションの蔵書構築と蔵書管理には上層部から大きな圧力が掛かっている。それは「場としての図書館」利用、つまり図書館のスペースはもっと学生達のネットワーク、学習、グループ活動、情報の交換、知識の交流と創造の場所として利用されるべきものであって、利用頻度の少ない書籍を高価なスペースを犠牲にして保存しておくものではない、という考えから来るものである。日本語や中国語文献など特殊なものは当然利用頻度が限られてくる。今後図書館は、電子資料を提供していくことが主になり、利用頻度の少ないコレクションのためにスペースを割くことは不動産の大きな負の要素だとみなされる。リモートアクセス施設のある大学図書館ではすでに多くの書籍をリモート施設に移管し、図書館は学習コモンズに変身しているところが多くなっている。本校ではリモート施設がないため引き続き図書館内に書籍が配架されているが、現状見直しの圧力は増し、書架の配置替えや除籍活動にもかなりの時間を費やしている。英語文献、特に科学技術、ビジネス関係は多くが電子リソースに移行しており、地域研究でも中国語文献はかなり電子化が進んでいるので電子書籍の購入も増加している。利用者の認識でトップであった図書館のバイヤーとしての役割にあたる蔵書構築関係の仕事は、今後、研究プロセスや研究内容の変化に沿って変わっていくことになる。高価なデータベースをコンソーシアムで購読するように、コンソーシアム間の優先的相互貸借を益々強化し、其々の機関に特徴ある蔵書構築を進め予算を有効に使うなどメンバー機関間の協力がますます強化していこう。選書方法も大きく変わるであ

ろう。今は英語の approval plan のプロフィールは1つの機関ごとに設定しているが、コンソーシアム毎に設定し重複を避けるようになるかもしれない。また、当館でも英語の電子書籍に関しては、選書を利用者にゆだねる実験を始めた。MyiLibrary 社が提供している電子書籍から利用者が必要とするもののみ購入する方法である。MyiLibrary 社の文献データを当館の OPAC に載せ、利用者が検索した際、目次までは何度でもオンライン上で見ることができるが、本文をオンラインで読むと1回のアクセスとみなされる。本文アクセスが3回になると、自動的にその電子書籍が購入され図書館の電子書籍のコレクションとなるというものである。ライブラリアンの判断は OPAC に載せるタイトルを MyiLibrary 社が提供する23万タイトルから選択する基準（プロフィール）を設定することである。果たして電子書籍予算の上限内でどのくらいの書籍が利用者に発見され購入されるのであろうか。

－図書館システムの変化－

利用者にとって、図書館の OPAC すらリサーチの出発点になっていない現実が示されているが、そんな折、すべてのリソースを OPAC に統一した ExLibris の次世代図書館システム Primo Central version 3.0 のデモがあった。OPAC の画面上で図書館目録、図書館が購読している学術誌データベース、オープンアクセス情報、図書館独自で開発し、ローカルサーバーに載せた情報データベースなどをすべて Google サーチのように検索し、アクセスできる。1つの画面から全く出ることなく、利用者（ライブラリアンも）が求める One stop shopping で情報検索とアクセスができ、ファセット検索や、あいまい検索、ランク式検索、検索主題に沿ったお勧め、ILL まですべてがシームレスに行なえるシステムであった。すべてを OPAC に収めることで、図書館の OPAC が研究プロセスの出発点に再び“振り返る”ことを狙い、益々利用者への利便性が強化されたシステムデモだった。さらに、このシステムにはリソースの購入、逐次刊行物の管理、購読データベースの契約管理、その他の図書館管理業務が理想的に統合されており、デモを見た限りでは、図書館の運営管理のための人員削減にも対応できるように考慮されていた。このシステムが実際に稼動する時、今までライブラリアンが整えてき

たインフラがシームレスにつながり、蓄積してきたデジタル資料、原資料や機関リポジトリ資料、アーカイブ資料などがより効果的に検索され、発見され、研究に活かされることになる。

ライブラリアンの職は絶滅するのか

筆者はライブラリアンの職は進化していると思いたい。ライブラリアンがゲートキーパー（資料への門番）だったのは80年代に終わった。90年代初期までにライブラリアンはサーチャーとなり、資料と利用者の仲介者となった。2000年初期には資料へのアクセス手段を創造し、資料発見に付加価値を加え、利用者への情報への教育者の役も開発した。21世紀に入り、新たなプロジェクトを立ち上げ、利用者の研究プロセスの変化を理解し、様々なニーズに応えようとしている。1つ1つの音色を理解しながらオーケストレートできる柔軟性と行動力を持っている。

バークレーの三井文庫に収められていた江戸期の地図がデジタル化によって息を吹き返し、付加価値を伴って利用され、新たな発見がなされる。石松氏はレファレンスデスクを飛び出し、世界中を飛び回って多くの人たちに生まれ変わった資料を体験させてくれる。ライブラリアンは劣化してしまいこんであった巻物の修復という地味な伝統的図書館の仕事を皆がわくわくするプロジェクトとして企画できる。資金調達をし、支援者を集め、デジタル化し、大学・図書館・地域・世界を結びつけ、修復というプロジェクトから新たな発見と体験を創造できる推進力となりえる。常にアンテナを高くしていち早く環境の変化を理解し、人的ネットワークを活かし、情報発信、検索、アクセスのインフラを利用者のニーズに合わせて整えることができる。資料へのアクセスの仕方と利用方法は多様になっていき、図書館は「情報のハブ」として新しい機能を開発していく。利用者の期待の変化にライブラリアンは新しい役割を作り上げていけると思いたい。進化していけないライブラリアンは去り、進化していくライブラリアンが取って代われる有機的な図書館が利用者と共に歩んでいけると思う。

（ばぜる やまもと ときこ。ハワイ大学マノア校図書館
アジアコレクション部日本研究専門司書）